

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第615号 平成25年9月24日

バイトテロ

飲食店やコンビニで、アルバイト店員が業務用冷蔵庫の中にねそべったり、ピザ生地で顔面を覆ったりといった不適切な行為をし、しかもその様子をツイッターやフェイスブックに投稿するといったケースが後を絶たず、大きな社会問題となっています。

このようなアルバイト店員の行為を、最近では「バイトテロ」と呼んでいる様ですが、本人にとっては「ちょっとした悪ふざけ」のつもりでも、現実には、彼らの行為によって企業側は大きなダメージを受けています。

投稿した本人のツイッターが炎上するというのは自業自得ですが、舞台となった飲食店やコンビニ等が閉店に追い込まれたり、フランチャイズ契約を解除されるといった事態も生じています。

「バイトテロ」によって被害をこうむった企業側では、問題を起こしたアルバイト店員を解雇するだけではなく、損害賠償の請求を検討するところも出て来ています。

また、先日は、道警のパトカーの上で悪ふざけしていた少年が逮捕された様に、行為によっては、損害賠償だけではなく刑事責任が問われる場合もあり、「ちょっとした悪ふざけ」で一生を棒に振る様な事にもなりかねません。

企業側では、「バイトテロ」の存在に苦慮しており、多額の損害賠償の請求や店を閉じる事で対抗しようとしているように見えます。

企業側のそうした厳しい対応に対し、神奈川工業大学の山本聡教授（法学・刑事法）は、「制裁一辺倒、安易すぎる」とする批判的な意見を述べています（9月5日付朝日新聞）。

私も、山本教授がいう様に、制裁一辺倒で「バイトテロ」の再発を防げるとは到底思っていませんが、企業側の自己防衛として止むを得ない面があるとも思っています。ただ、私が懸念しているのは、マスコミが「バイトテロ」の問題を連日の様に取り上げ、企業側の厳しい姿勢を報道しているにもかかわらず、一向に効果がない様に見える事です。

この点について山本教授は、「彼らの愚行は内輪で盛り上がるため、迷惑をかけている意識がないのだし、愚行者はニュースも見ない」と述べています。

「バイトテロ」という行動に走る若者達に見えている世界は、あくまでも「仲間

内」の狭い世界だけで、自分の行動が、社会からどう見られているかといった意識が欠如している様に思われます。

「ちょっとした悪ふざけ」がとんでもない大きな問題となり、損害賠償まで請求されるという事態に、一番戸惑っているのは、愚行者である本人達でしょう。「バイトテロ」には、社会に対して何らかのメッセージを発しようという意図があるとは思えません。むしろ、仲間達から面白がられたいという自己顕示欲が強いのだと思います。

昔だって、若者達の悪ふざけは沢山あったのであり、今は社会で立派に活躍されている方の中には、「若気の至り」という恥ずかしい思い出をお持ちの方がいると思いますが、今日のように広く社会問題として広がる事はなかったと思います。しかし、今では内輪のノリでやった行為でも、瞬時に広がり、匿名での投稿も瞬く間に本人が特定され、非難の集中砲火を浴びる事になります。それを可能にしているのはSNSといった交流サイトの存在ですが、若者達に欠落しているのは、情報社会の持っている怖さかも知れません。ネットで繋がっているのは仲間内だけという思い込みが、事態を深刻にしています。しかも、その仲間の中には、自分が住んでいる「地域」とか、自分が勤めている「会社」という存在は入っていないように感じます。

彼らには、自分の行為がごく狭い仲間内からどう見られるかという事に関心はあっても、「地域」や「社会」にどういう迷惑を及ぼすか、また、それによって「社会」や「会社」がどう反応するかという事への想像力が働いているとは到底思えません。

社会学者で詩人の水無田気流さんは、相次ぐ「バイトテロ」に関して「若年層の非正規雇用比率が上昇した昨今、身内意識の暴走は、かつてのような会社村に所属しない者たちの象徴である（9月10日付北海道新聞）」と述べていますが、鋭い指摘だと思います。

各学校では、現在「情報教育」に力を入れ始めていますが、「バイトテロ」の再発を防ぐという観点からすればそれだけでは十分とはいえません。道徳教育等の実践を通して、自分達が社会とどうかかわって生きているのか、更には、この社会の中で如何に生きていくべきかという根本的な問いと真剣に向き合い、考えさせる取り組みが、ますます重要になっているのだという事を強く感じています。

（塾頭：吉田 洋一）